

2-6					
主題	手すり付きターンテーブル導入によりトイレ排泄の安全性向上と介助者の負担軽減を目指した研究				
副題	双方にやさしいトイレ支援				
キーワード 1	排泄ケア	キーワード 2	介護負担	研究(実践)期間	9ヶ月

法人名・事業所名	社福) こうほうえん 特別養護老人ホームうきま幸朋苑				
発表者(職種)	幸村優美(作業療法士)、持吉孝郎(医務係長)				
共同研究(実践)者	なし				

電話	03-5914-1331	FAX	03-5914-1350
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	平成 19 年に開設し、法人理念である地域に開かれた、地域に愛される、地域に信頼される施設をめざしています。当苑では、ICT 機器の有効的活用、エビデンスに基づく介護推進、人財育成制度、研修制度、業務改善提案制度、公益的事業といった 10 の働きがい掲げ利用者・職員共に安心できる環境作りに取り組んでいます。
-------	--

<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>トイレでの排泄介助は「狭い空間」で行うために、介助をする介護職員も利用者も、移乗に良好な体勢を取れない状況となることがあり、互いの無理な姿勢からの移乗介助において、転倒事故が起こることがあると報告されている。</p> <p>当施設では全介助レベルの利用者の移乗介助としてリフトが導入・運用されているが、リフトの適応前である、立ち上がり・立位保持が介助で出来るが、方向転換時の足部の踏み替えが困難な方の介助では福祉用具の利用がない環境である。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>立ち上がり・立位保持が介助で出来るが、方向転換時の足部の踏み替えが困難な方のトイレ内福祉機器が必要であると考えた。トイレでの排泄介助の安全性向上と、介護負担軽減を目的として手すり付きターンテーブルの導入と介助手順や環境を見直して検証した結果を報告する。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>1. 4名の利用者に対し、手すり付きターンテーブル使用有無で以下3項目の比較をした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車椅子からの立ち上がり・立位保持・下肢捻転の有無 ・便座での排泄姿勢 ・トイレ介助時間(陰部洗浄・清拭は、排泄状況に応じて変化するため測定外とした。) <p>2. 職員に対し、体幹前傾・回旋角度の測定器(以下ジャイロセンサー)を使用し、手すり付きターンテーブルを使用した排泄介助中の、過度な前傾姿勢介助時間を計測した。前傾姿勢の要因を抽出・改善し、4週間後に再計測した。</p> <p>《4. 取り組みの結果》</p> <p>1. 手すり付きターンテーブル使用前後での利用者・介助者の動作や姿勢の比較</p>

・車椅子からの立ち上がり・立位保持・下肢捻転の有無

立ち上がり動作は 4 名中 2 名・立位保持は 4 名中 3 名の介助量軽減が図れた。立位姿勢について、導入前は立位保持に両手で支える介助が必要であったが、導入後は後方重心が改善し片手介助で可能となった。方向転換時の下肢捻転は 4 名が改善した。

・便座での排泄姿勢

便座上に斜めに座っている排泄姿勢は、便座内へ坐骨が滑り落ちる事による排泄姿勢の不安定性が考えられたが、4 名全員が壁の手すり方向に、斜めに着座していた。導入後は正中位に着座可能となり、坐骨が便座上に載ることで座位安定性が向上した。

・トイレ介助時間

トイレ動作介助時間は延長したが介助者から「楽になった」との発言が得られた。

2. ジャイロセンサーを使用し、トイレ介助時の過度な前傾姿勢での介助時間

初回測定時、前傾姿勢介助は合計 18 秒間であった。体幹前傾 20° 以上での介助は以下 3 点となり、要因と対策を検討した。

- ① パットの準備…便座横の介助スペースを確保できるトイレに変更
- ② 車いすの準備…車いすセッティングの位置・手順の見直し
- ③ 下衣更衣介助…下衣のサイズの見直し

②と③の対策後、過度な前傾姿勢介助は合計 6 秒間に短縮した。①の対策として、介助スペースの広いトイレを使用した計測では、合計 9 秒間という結果となった。

《5. 考察、まとめ》

現在当施設の共用トイレでは、手すり位置と壁が近い事で前傾誘導する介助が制限され、円滑な立ち上がり介助がしにくい場合がある。また、立ちあがり後に両手で縦手すりを把持すると、方向転換時に手すりが回転の軸になり、着座位置が便座に合わない環境にあり、動作能力が低下している利用者にとって偏った着座による転倒転落や骨折リスクが考えられる。

今回の研究では手すり付きターンテーブルを使用することにより、介助量軽減・便座座位の安定性向上を図り、転倒転落リスクが軽減された。介助者から「楽になった」との感想が得られたが、ジャイロセンサーでの介助者の姿勢測定結果によると、過度な前傾姿勢での介助は継続されていることが分かった。要因を抽出し、衣類の選定・作業手順の見直しにより前傾姿勢介助の合計時間は 33%に減少、トイレ環境の変更では 50%に減少したという結果が得られた。これらの結果は、福祉用具の導入と動作の介助手順や環境的要因を検討することで利用者・介助者共に負担が軽減されたと考えられる。今後の課題として、介助スペースを考慮したトイレ環境への改善と、継続的な職員の意識付けが必要である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

平成 29 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業「介護サービスの利用に係る事故の防止に関する調査研究事業」報告書、公益財団法人介護労働安定センター
「福祉用具シリーズ Vol. 1. 15_腰痛予防編」、テクノエイド協会

《8. 提案と発信》

排泄ケアについて利用者・介助者の両方の側面から見直すことで、双方にやさしいトイレ支援を実現出来るのではないかと考える。現状に甘んじることなく、「もっと良く出来ないか」と常に考え探求していく精神により、選ばれるサービス・選ばれる職場に繋がるのではないかと。